

教員活動状況報告書

提出日：令和 6 年 3 月 3 日
 所 属： 獣医 学部 獣医学科
 氏 名： 上家潤一 職位： 教授
 役 職：獣医学部教務委員長、獣医学研究科専攻主任、
 病態獣医学系主任

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

学生に必要な知識を伝えることに責任がある。知識の伝達には学生の理解が必須であり、そのために学生が自律的に勉強するように、当該分野に興味を持たせる授業を心がけている。病理学関連の授業では、実際の症例を提示し、自身の診断に至る思考過程を説明している。演習、実験では、実験の意義を理解し、学生が自分で研究計画を組み立てるよう指導している。

| 科目名 | 学科・専攻 | 必, 選, 自 | 配当年次 | 受講者数 |
|---------------|---------|---------|------|------|
| 獣医病理学総論 | 獣医学科 | 必 | 3 | 147 |
| 獣医病理学各論 I | 獣医学科 | 必 | 3 | 149 |
| 獣医病理学各論 II | 獣医学科 | 必 | 4 | 138 |
| 獣医病理学実習 I | 獣医学科 | 必 | 4 | 140 |
| 獣医病理学実習 II | 獣医学科 | 必 | 4 | 140 |
| 総合獣医学 | 獣医学科 | 必 | 6 | 143 |
| 科学の伝達 | 動物応用科学科 | 選 | 4 | 2 |
| 地球共生系サイエンスワーク | 全学科 | 自 | 2, 3 | 1 |
| 獣医学特論 I | 獣医学科 | 必 | 5 | 2 |
| 獣医学特論 II | 獣医学科 | 必 | 6 | 3 |
| 卒業論文 | 獣医学科 | 必 | 6 | 3 |
| 獣医病理学特論 | 獣医学研究科 | | 1 | 2 |
| 獣医病理学特別演習 I | 獣医学研究科 | | 1 | 2 |
| 獣医病理学特別演習 II | 獣医学研究科 | | 2 | 1 |
| 獣医病理学特別演習 III | 獣医学研究科 | | 3 | 1 |
| 獣医病理学特別実験 I | 獣医学研究科 | | 1 | 2 |
| 獣医病理学特別実験 II | 獣医学研究科 | | 2 | 1 |

| | | | |
|---------------|--------|---|---|
| 獣医病理学特別実験 III | 獣医学研究科 | 3 | 1 |
|---------------|--------|---|---|

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

本学の基盤理念である学理討究はすなわち連続した課題解決であり、自ら課題を設定し、その解決手段を探ることが求められる。大学教育においては学生の自律的な学習が重要である。現在の多くの学生は与えられた課題を既定のルールで解決する受験勉強の延長線上にあり、高学年においても自分で課題の設定ができない学生がいる。自身で課題探索と目標設定、解決策の計画ができる学生を育てたい。そのためには、現在の科学技術の限界を理解することの必要性を学生に伝達しなければならない。教員は関連分野の歴史をすると同時に、常に最先端の獣医医療実施者もしくは研究者である必要がある。本学設立の真の理念を理解し、発展的に学生に伝えたい。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

正しい知識に基づいて考え、判断する能力を育成したい。病理診断は症例の特徴をとらえ、疾患に分類していく。テキスト内容を画像に置き換えて理解し、症例に応用することが求められる。実症例を経験させることが最適であるが、150名が対象では現実的ではない。そこで、授業では、自験例の写真を紹介しながら、診断に至る思考過程とその根拠画像を解説し、疑似的に病理診断を体験させている。画像の解説では、写真にイラストツールで印をつけて解説し、ライブ感を心がけた。コアカリキュラムで設定される基礎知識の定着のために、毎回10問の選択式の小テストをオンラインで配布した。

アクティブラーニングについての取組

講義動画ファイルと小テストは常時アクセスできるようにした。繰り返し視聴する学生がおり、自主学習に活用されている。講義動画の配布によって質問数が飛躍的に増えた。ただし、質問は数名の特定の学生からであり、全体に自主的学習を普及させる工夫が必要である。

ICTの教育への活用

講義においてはオンデマンド型の動画配信を行った。復習のために、常時講義ファイルを視聴できるようにした。理解度を把握するために、講義ごとに google forms で小テストを実施した。小テストは回答提出の締切後も自由に閲覧できるようにし、復習の機会を提供した。学生から、小テストが知識のアウトプットに役立つので問題数を増やしてほしいとのコメントがあった。活用されていると考えている。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（分量の目安：15～24行（600字～960字））

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

（①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A）

②学生の理解度の把握（A）

③学生の自学自習を促すための工夫（B）

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等) (B)

⑤双方向授業への工夫 (B)

上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

学生目線で自分の講義動画を客観的に見直し、わかりにくいスライドを分析して重要事項が伝わるように改善した。教員が自身の講義を見直すことができる点はオンデマンド講義の大きなメリットであり、講義を改善する良い機会であった。リアルタイム授業のみ行って自身の講義を見返さないようでは、独りよがりな講義を改善することは絶対にできないと感じた。

質問をメールで受け付けたが、質問する学生は数名に偏っていた。質問しやすい環境作りのために、講義内で教員に話しかけやすい雰囲気を作る。

自主学習が不十分であった。復習のための小テストを活用する学生もいたが、多くは予習復習が不十分であると考えられる。興味を持たせることが重要と考え、自験例について臨床情報を含めた症例について病理診断にいたる過程の解説を行う。

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。(V 学科, M 学科の教員の方のみ記載してください。)

過去問を分析して頻出する疾患をピックアップし、問題の傾向を解説した。特に画像問題を意識し、頻出する疾患の典型的な肉眼像、組織像を繰り返し説明した。

5.学生授業評価 (分量の目安：4～7行 (160字～280字))

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

授業評価は概ね高評価であった。実症例の写真の提示と丁寧な解説が評価されており、今後も継続する。

② ①の結果はどうでしたか。

高評価であり、不満なコメントはなかった。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

今後も症例紹介を積極的に行う。

6.学生の学修成果 (分量の目安：4～7行 (160字～280字))

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

病理診断で経験した典型例を写真で紹介し、診断のポイントを解説している。診断に至る過程を説明する。肉眼所見、組織所見を解説することで、疾患を実証例のイメージをもって総合的に理解させる。画像解説ではペンツールでイラストを描きながら解説することで、視覚的に説明を資料に残す。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

学生の授業評価コメント

- ・重要なポイントがわかりやすく強調されていた点。もともとスライドに図や写真が多いことに加え、授業動画内で先生自ら図を描いて説明して下さった点。
- ・複数回動画を見ることでだいぶ理解度が増した。
- ・組織の図や写真を用いた説明がとても丁寧でわかりやすかった。また、大事なところを繰り返し授業しているのも良かったです。
- ・毎回の小テストの問題数がちょうどよく、何度も回答できたので勉強になった。

7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況) (分量の目安: 1~2 行 (40 字~80 字))

主に動画視聴にて参加している。

8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)

ドリル形式の課題を中心にして自主学習を推進してきたが、試験対策の暗記が主体となってしまう。実際の症例の病理所見をとり、診断に至るための考える力を養うために、講義中に記述試験を取り入れる。

9. 添付資料 (根拠資料) (※) 資料名のみ

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。